

「自由の探求」を求めてモームの生きざま

田 中 正 志

(一)

Maugham は小説家、劇作家、随筆家と呼称され、19世紀末、1897年、処女作、長編 *Liza of Lambeth* を発表し、1958年、評論集 *Points of View* を出版し、本書をもって、60年におよぶ作家生活に終止符を打つと宣言するまで、長編小説、20、短編小説、91、戯曲、25、随筆と旅行記を併せて単行本14冊と世に出し、1965年12月16日、南仏ニースのアングロ・アメリカン病院で死去。享年91才という長寿を全とうする。

(二)

モームを知るにはモーム自身が自分の作品について *The Summing Up* (1938) *Book and You* (1940) *A Writer's Notebook* (1949) *Ten Novels and Their Authors* (1954) *Points of View* (1958) 等の中で解説的説明を加え、さらに、モーム自身の心境を正直に述べているので大いに参考になる。

加えて、モームを知る道しるべとなるものとして、モームの甥 Robin Maugham の著書、*Somerset and all the Maughams* (1966) はモームの身近な存在として生活を共有し、見聞した者として、モーム本人の生きざまを探求するには最高の著書と言えよう。

Robin Maugham は Drifffield (*Cakes and Ale* の主要登場人物) について「死に至るまで人に知られず孤独であった真の彼は、作家としての彼と生活者とし

ての彼の中に、姿なく声なく歩いてきた生霊であり、世間が Edward Driffield と思ひこんでいたふたつの操り人形を超然とした皮肉な目で眺めて微笑していたような気がする」という一節から、これはトマス・ハーディのことだと一般に人は思っているが、実はこれこそ William Somerset Maugham の真の姿だと私は信じて疑わないと述べている。

ところが晩年のモームの実体は功成り名遂げたはずのモームは、傲慢になるかと思えば次の瞬間には自己嫌悪にさいなまれ、痛恨し憎悪し憤怒し、皮肉を言い、嘆き哀惜し、涙を流し、それまでに築きあげたモームの生涯も明快なる思想も、魅力に富んだ作品も、哲人ぶりも、実は満たされぬ欲情や野望や憧憬、悔恨や絶望や恐怖に引き裂かれた人間的なモームの自我の虚像ではないかと思われる。

モームの自画像と性格には矛盾があり、要するにあまりにも複雑な人間だったと考えられる。そのことを顕著に表わしているのは、Robin Maugham が「ついに彼を理解できなかつたような気がする。ウィリー（モームのこと）の友だちのなかにも彼の若いころのみじめな思いから生まれた病的なまでの内気さの幾重もの層を通して、その奥のウィリーの真の姿を窺い得た者はほとんどいないのではあるまいか」と著作の中で述べていることはまさにモームの観察としては的を得ているものと言えるのではないだろうか。

モーム研究者の相良次郎氏のモームの人間分析は一考に値するものと賛同するものである。

相良氏はモームは複雑で不可解であるが、モーム自身や甥の Robin の言葉から、モームの(1)～(4)に分析することができる。

- (1) 外向的でなく、病的に内向的であったこと。
- (2) 循環気質でなくて極端な分裂気質であったこと。
- (3) 少年時代に受けた心の傷から、抜き難い劣等感をもっていたこと。
- (4) 性的に4分の3ほど異常で、同性愛的傾向をもっていたこと。

同性愛的傾向と言っても、質にせよ、原因にせよ、これほど多様性のあるも

のも少くない。だが、精神的な意味での男女両性の兼備である場合は文学者にとって大いなる天性となる。即ち、すべて男性のすぐれた思想的構成力と女性の豊かな感性をもっている。

モームは現実をありのままに把握する力、女性心理に対する無類の洞察力など女性的性格をもっているものでなければ不可能なことである。

モームの極度に内気で自己意識的傷つき易い内向的性格は何が原因であったろうか。

モームの生まれつきであるとともに、両親に早く死に別れ、冷たい伯父の牧師に預けられ、愛に飢え、学友にいじめられ、加えて、吃りであったことなどから助長されたことはモーム研究者すべてが認めるところであろうと筆者は断言できる。

モームは内向型で内気で慎重、邪推深い観察のうしろに身を守る性格である。何故、モーム自身以外の人間一般の性格に、異常な関心をもっていたのであろう。

モームは自己意識的で傷つき易く、他人と融和したい願望をもちながら、厚い壁を感じ周囲に溶けこめず、そのため孤独になり疎外感をもち、それに耐えられず、その原因を自他の性格に求め、それを分析理解し、それによって自分の前にある壁を克服しようとする。

モームは観察したり内省したりするうちに、彼は自分と似た性格と、それとは相反的な性格、即ち、内向型と外向型を見つける。

(三)

モームの小説の特徴は題材として扱うのは、徹底的に、人間、特に、人間性や性格である。

Of Human Bondage (1915) はモームの代表的な作品であるがモームの生涯を貫く諸思想を包含している意味で卓越していると言えるだろう。

主人公 Philip は生、死、病氣、貧富、神、愛、性、野心、等々、内外から

人間の諸々の業や絆に直面し、諸々の本能や環境や偶然のままに押しやられて人生を流れていく人間のすべての営みの空しさに耐えかねて、生の意味と目的を探求し模索する。

ペルシア絨毯の謎の解明によって、モームの心の扇が開くところはこの小説の最高のクライマックスと言えるのではないだろうか。

織匠が意味を考えることなく美しい模様を織っていくように、人間が織りなす人生もただ、それが美しいものであればそれでよいという、無用無目的の唯美哲学に到達する。

Robin Maugham はこの *Of Human Bondage* の中で主人公 Philip に兄弟も姉妹もないというのは意味深いと指摘している点は興味深い。

小説の中では Philip は一人息子で孤独である。それはモーム自身が兄たちの存在を意識せず、孤独を感じとっていたからにちがいない。モームは Dover College のスポーツマンで頑健な兄たちとは、全く別の世界に住んでいたことになるであろう。

モームを孤独にした一因に自分の吃りがあったことも否定できない事実であろう。

モームは自分の劣等感の象徴である吃りについて語ることはめったになかったが、それをどう感じていたかは、旧友の Arnold Bennett を論じたエッセイにうかがわれる。

As he grew older, Willie learned to use his stammer to give point to a particular word in a sentence, but when he was nervous or distraught his words came out painfully, slow, and distorted, and evidently "it was torture to him" also. For this reason when I have quoted his speech in this book I have only given a slight indication of his stammer when I felt it helped to reproduce the flavor of a particular comment.

It is probable that if Willie's childhood prayer had been answered and he had lost his stammer he would not have been an agnostic; it is almost certain that without an impediment in his speech Willie would not have been a writer; he would have been persuaded to become a lawyer — like

his brothers. But Willie's stammer made him reserved; it forced him to remain an onlooker; it made him into the detached observer of life who became the first person singular of his writing. His stammer made his prose pithy, crisp, and succinct and made the dialogue of his plays neatly turned and well balanced. Perhaps Willie's impediment made his fame. But if Willie's stammer was responsible for turning him into a superbly successful writer, the suffering and humiliation of his early years turned him into a strangely diffident character. Willie was emotionally crippled by his childhood. He was a classic example of what psychologists call "the deprived child," and his was borne out by his constant and sometimes frantic search for happiness and reassurance throughout his life. (1)

法律家一家でモーム家に生れたモームは恐らく、兄たちのように法律家になるように説得されていたであろうが Arnold と同様に吃りのために、モームも控え目な人間になり、傍観者の位置にとどまり、間隔をおいて人生を観察する人間となり、それが転じて、モームの作品において、「一人称単数」となったのも吃りに起因すると Robin Maugham の意見には説得力があると筆者は思わざるをえない。

モームの言語障害が彼の名声を作り出し、作家として成功に導いた原動力になったとしても、幼少の頃の苦しみ、屈辱は彼という人間をかえてしまい、つまり、感情上の不具者となった。

そういう意味で、モームは心理学者の言うところの「不遇に育った子供」の典型的な事例で、そのことがモームの全生涯を通じて、幸福と自信とを絶えず追求する衝動にかきたてられたのであろう。

(四)

モームの作家としての生涯における思想的発展は紆余曲折しながら、人間存在の探求、すなわち、人間いかに生きるべきか、何が価値であるかという問題

に進展する。

Liza of Lambeth (1897) はモームの処女作で人間が負わされている業の研究、勿論、この作品の場合は貧民街に住んでいる Liza という女性の性に目ざめ、妻子ある中年男性との情事に Liza が溺れ、破滅する姿をリアリズムに描写。

The Moon and Sixpence (1919) はモーム独特の一人称単数の視点で客観的に無私の愛情の讃美であり、主人公ストリ克蘭トの性格の克明な追求。

Cakes and Ale (1930) *The Razor's Edge* (1944) 等々の作品で善の追求とレマ主人公が次から次へと展開する。

モームは自分が感受性の強い人間で、人間を愛することにおいては人一倍であるだけに性格、人間研究をし、それを写實的に描写しリアリストとして名声を大にしていく。

モームは読者に知識階級ばかりでなく、一般大衆に面白く、楽しませるものを提供するのが作家の大切な任務であると50年間以上も実践する。

そのために、モームは文学は現実からの逃避であると主張し、“Story teller”と自称し、明快さ (lucidity)、簡潔さ (simplicity)、音調のよさ (euphony) の3つを文章の目標とする。

モームは多くの作品にはモーム自身の人生観が浸透しており、一種独特の持ち味を与えているが、その人生観こそニヒリズムを根底にしたユーモアのある諦観であろう。

モームは登場人物に対してはきびしい態度で接しているが、本人自身の女性関係はどうであったのか。

モームは1913年、39歳の時に Syrie と出合う。

“Mer-my greatest one was this,” he stammered. “I tried to persuade myself that I was three quarters normal and that only a quarter of me was queer — whereas really it was the other way round.”

It was in 1913, when my uncle Willie was thirty-nine years old, that he met the woman he later married, Syrie was the daughter of the well-known philanthropist Dr. Thomas Barnardo, and still married to

Henry (later Sir Henry) Wellcome, of the firm of Burroughs, Wellcome, the chemists. She was small and smart and pretty. She had radiant brown eyes and a beautiful skin; she had high spirits and was endowed with a brilliant vivacity that lasted until the day she died. Willie was flattered when she made it clear that she was attracted to him. He very much wanted to lead a normal sex life, and it is interesting that in his autobiography, written when he was well over eighty years old, he was proud to be able to write, "In the circles in which we moved it was an understood thing that I was Syrie's lover."

He married Syrie in 1916. But quite apart from the obvious incompatibility of temperaments, the marriage was bound to have failed — because even before he married Syrie, Willie had met the young American named Gerald Haxton.

(2)

Syrie は Dr. Thomas Barnardo の娘で Henry Wellcome (のちに Sir Henry) という英国人名辞典に出ている製薬会社長の当時はまだ妻であった。

小柄だがスマートな美人で、勝気さと天与のいきいきした才気煥発なこの女性がモームに惹きつけられたこと明らかにしたとき、モームは得意を感じる。結局、1916年に二人は結婚するが、二人の性格が相いれないことは別にしても、この結婚は破局におちいる運命を負わされていた。形式的に約10年間、結婚生活をつづけたが、離婚ということで終わり、妻は娘を引きとり、1955年に妻が死亡するまで、モームは慰謝料、子供の養育費を送りつづけることになる。

モームの離婚の一つの原因として、同性愛がとりあげられ、特に、モームの秘書、Gerald Haxton 氏との仲をあげ、モームは妻より、この若いアメリカ人の男性を愛したからだと言われている。

モームは前述したように、自分の作品の中では荒っぽく、無慈悲なくらい女性をやっつけている。少数の例外を除いてモームは異性に好意を持ちえなかった。

1962年に発表した「回想録」によると *Cake and Ale* の Rosie というヒロインのモデルとなった、モームと8年に及ぶナンという女性のみが唯一、モームの

生涯で思い出される人であったと想像できる。

モームが関係をもった女性は積極的な女性のように思われる。Of *Human Bondage* に登場する Mildred の実在人物はモームの伝記 *Somerset Maugham* の著者 Richard Cordell のみが知っていると言われている。

モーム研究家の田中睦美氏に Richard Cordell は次のように手紙で言っている。

“I am certain I know the original of Mildred, but I told Mr. Maugham I would never tell, and I never will”

さらに、田中睦美氏はモームが女性に関心を H. G. Wells や Arnold Bennett などと違って示さなかったため、彼を homosexual と Robin Maugham は断定するが、私には断定する勇気がないと主張されている。

確かに、さまざまな考察をしても、白黒つけられるものではなく、著者にはそういう一面もあったろうという灰色状態から脱することができない。

(五)

モームの短編、*Rain* を筆者は10代の時に読み、宣教師 Daridson に対する痛烈な描写に大きな衝撃を今日でも忘れられない。

子供心に宗教家に対する畏敬の思いがあった筆者にとっては言語で言い尽くせない暗雲消えることがなかったという経験をもつ。

後年、前述の Richard Cordell の *Somerset Maugham* という伝記やモームの作品の諸々、特に彼の伝記的小説といわれている *Of Human Bondage* 等を通じて、モームの生いたち、特に両親を亡くし、幼時に培われたキリスト教への不信であることを確信する。

モームの宗教観は *The Summing Up*, Chapter 69 に主張しているので一部引用する。

But I have not done with evil yet. The problem presses when you come to consider whether God exists, and if he does, what nature must be ascribed to him. The time came when, like everybody else, I read the engaging works of the physicists. I was seized with awe at the contemplation of the immense distances that separated the stars and the vast stretches of time that light traversed in order to come from them to us. I was staggered by the unimaginable extent of the nebulae. If I understood aright what I read, I must suppose that at the beginning the two forces of cosmical attraction and repulsion balanced so that the universe remained for untold ages in a state of perfect equilibrium. Then at some moment this was disturbed and the universe, toppling off its balance, gave rise to the universe the astronomers tell us of and the little earth we know. But what caused the original act of creation and what upset the balance of equilibrium? I seemed inevitably drawn to the conception of a creator, and what could create this vast, this stupendous universe but a being all-powerful? But the evil of the world then forces on us the conclusion that this being cannot be all-powerful and all-good. A God who is all-powerful may be justly blamed for the evil of the world and it seems absurd to consider him with admiration or accord him worship. But mind and heart revolt against the conception of a God who is not all-good. We are forced then to accept the supposition of a God who is not all-powerful: such a God contains within himself no explanation of his own existence or of that of the universe he creates. (3)

Rain の宣教師に対する反感は両親の死後、モームの後見人となり面倒を見てくれた伯父の牧師 Henry Macdonald Maugham との生活で体験し、偽善的生活を見聞した結果と推測することは当を得ていると疑う余地はない。

一方、モームは、人生とは、人生の意味とは、をまじめに考えた。さらに、宗教についても、伯父の牧師のもとで英国国教が唯一の真正な宗教だと教育されていたが、ドイツの遊学時にカトリックをドイツ人の真剣さは英国国教と同じであること知り、各人の出生の地によりその人の運命がきまる不合理に衝撃をうける。

無神論者モームとなっても、彼の求道はより一層強くなり、どんなに神を否定しても、心にひそむものを打ち消すことができず、特定の宗教を越えて、宗教の本質の探求が始まる。モームの勤勉さは60年に及び少しも変ることなく午前中は執筆と読書に熱中し、哲学書、宗教書等を読みあさる。

現代の随想「田中美知太郎集」に哲学者、田中美知太郎氏が「モームの哲学勉強」という項目をあげ、モームが多量の古典哲学書を読破していること驚嘆している。

モームは東洋思想にまで発展し、仏教についてもかなり研究し、*Of Human Bondage* における、あの悟りは仏教のいわゆる「無の精神」に通じることは論を待たないであろう。

(六)

モームは自分の作品について自分で解説を加えているが、B. B. C. で1954年、80才の誕生日を記念して思い出を語っている。勿論、モームの処女作のことや、まず自分の成功の基礎となった劇作等々を講演している。

講演記録によると、第一次世界大戦で人々の生活に変化はもたされなかった、と語っているがこれは少々問題点を含んでいるがモーム自身、反時代的な態度をとらせる要因があるのではないだろうか。

その要因の一つはモームの人間を見つめる目、文学に対する態度と関係があるように思える。モームのすべて作品を通じて一貫して人間の本質というものは場所によって表面的には変化はあるが根本的には時代の動きによって変化はあるものではないというモームの強い信念にもとづいている。

モームのこのような人間観は *A Writer's Notebook* に暗示しているように聖トマス病院の医学生だったころに確立していたと思われる。

モームは小説の材料さがしに苦勞する作家に対して軽蔑して、人生経験及び、それを求めることを実践した経験主義に基盤をおいた作家であったことはあれだけ多くの作品を書きつづけ、70才で *A Writer Notebook* を出版し、その序文に、

もっと勤勉に書いていたらまだ書く種はあったと豪語している点は作家とし卓越した一面を示すものであろう。

モーム諸作品の材料の収集はまず第一にモームの旅行好きが大きな要因であろう。

第一次大戦中には志願して前線に行き、戦後は世界の旅がはじまり、モーム文学の材料の大収穫となる。

A Writer's Notebook によると1914年（40才）には大戦中、フランス前線で病院の運転手、その後、情報機関に入り、フランス、スイスに滞在する。1916年（42才）には米国滞在中、南海冒険に出発。ハワイ、サモア列島、フィジー諸島を訪れる。1917年（43才）にはロシアにも行く。1919年（45才）には再度、米国へ。1922年から約一年かけて再び南海へ出かける。ニューギニア、ボルネオ、中国、マレー、ミャンマー等を訪ねる。

モームの40代の生気に富んだこの10年間にこれだけの行動を展開し、その結果として、*The Moon and Sixpence* (1919)、短編 *Rain*, *The Painted Veil* (1925) 等々が出版され、*Notebook* にも異国情緒あふれる描写で活力に満ちている。旅行はモームの作品の背景を大きく、無限にしていくが、モーム自身の人生観を変えることなく、すべての観察を冷静で、シニカルに今までの態度を変えるものではなかった。旅はまだ続き、1933年にはスペイン、1938年にはインドに行き、インドの哲学宗教を学び、東洋思想に魅力を感じて引きつけられていき、キリスト教の冷酷さを強く感じていく経験でもある。

モームはどんなに異国の旅をしようとも、彼に関心を与えたのはそれぞれの地で出合う人間そのもので、異国の珍しい風物ではない。西洋人であるモームが何故、東洋への旅、その経験が彼の作品にどのように役立ったのか。そのことに関して *The World of Somerset Maugham* の中で次のように述べている。

Why did Maugham turn to the Far East, what was he looking for? And how did his experiences there prove useful to him?

The author has himself given us a detailed reply to these questions and explained the reasons which prompted him to travel to the Far East.

According to his letter of December 6, 1928, addressed to Leslie A. Marchand, the idea of using the exotic background occurred to him more or less by chance as a result of his activities in the first World War, when his work in the Secret Service first took him into remote places.

“I think I had a vague impression that so far as I was concerned, I could not write any more novels about the English scene. I had put pretty well all my experiences into *Of Human Bondage* and I did not know how I was to follow that up. When I went down to the South Seas I came across a great many types that were entirely new to me, and situations which appealed to my imagination. I was very much struck by the effect of the climate and surroundings on the white people who for one reason or another had drifted there. So far as I was concerned I seemed to be entering upon an entirely new literary life, and after the war I deliberately travelled in search of this material... Perhaps it peculiarly appealed to me on account of my early years in France and other circumstances of my life which have prevented me from ever feeling entirely at home in England.” (4)

英国を舞台とした小説はもう書けなくなったと感じ、自分には全く目新しい型の多くの人間を求めるために異国の旅に出たモームの心境が吐露されている。

モームは60才で劇作に別れを告げ、74才で小説を断ち、84才で全ての作家活動の筆を絶つことを公言（例外として *Looking Back* という短い随筆はあるが）し、フランスの別荘で秘書やお手伝と共に暮らし、老人独特の癩癩をおこしつつ91才まで生きて我々に読書の楽しみを与えてくれたことに拍手を送りたいと思うのは褒め過ぎであろうか。

<Note>

- (1) Somerset And All The Maughams pp. 122-123
- (2) Ibid., p. 201
- (3) The Summing Up pp. 261-262
- (4) The World of Somerset Maugham p. 97

<Works Cited>

- Liza of Lambeth, Heinemann 1897
 Of Haman Bondage, Heinemann 1915
 The Moon and Sixpence, Heinemann 1919
 Cake and Ale, Heinemann 1930
 Maugham, W.S; The Complete Short Stories vol. one Heineman 1951
 Maugham, W.S; The Complete Short Stories vol. two Heineman 1951
 Maugham, W.S; The Complete Short Stories vol. three Heineman 1951
 The Partial View, Heinemann, 1954.
 The Summing Up, Heinemann, 1938.
 Brophy John; Somerset Maugham, Longmans, Green, London, 1952.
 Calder, R.L.; W.S. Maughan and The Quest for Freedom, Hinemann 1972.
 Magham, Robin; Somerset and all the Maughams, Greenwood Press Publishers, 1977.
 Jonas Klaus W.; The World of Somerset Maugham, Greenwood Press Publishers, 1972.
 Magham Ted; Somerset Maugham, Jonatham Cape, 1980.
 Magham Ted; Magham A Biograpy, Simon and Schuster New York. 1980.
 Pfeffer, Karl G.; W. Somerset Magham: A candid Portrait London: Golancz, 1959.
 Magham, Robin; Conversation with Willie, Recollection of W. Somerset Magham NewYork, Simon and Schuster, 1978.
 Burt, Forrest D.; W. Somerset Maugham, Twayne Publisher, Boston 1985.
 Curtis, Anthony; Somerset Maugham (Writers & their Work) Windsor, Berkshire, England, 1982.
 Somerset Magham Macmillan Publishing Co., Inc. New York. 1977.
 Cordell, Richard; Somerset Maugham; A Biographical and Critical Study Heinemann. 1961.
- | | | |
|-------------------|--------|---------|
| 「モームの世界」 | 相良 次郎著 | 評論社 |
| 「モームの研究」 | 中野 好夫編 | 英宝社 |
| 「モーム」 | 上田 勤著 | 研究社 |
| 「モームの二つの世界」 | 山川 鴻三著 | 京都あぼろん社 |
| 「サマセット・モーム小説群」 | 越川 正三著 | 関西大学出版部 |
| 講座・イギリス文学作品論 | | |
| 「サマセット・モーム」 | 高見幸郎著訳 | 英潮社 |
| 20世紀英米文学案内19 | | |
| 「サマセット・モーム」 | 朱牟田夏雄編 | 研究社 |
| 「モーム文学の魅力」 | 井出 良三著 | 大阪教育図書 |
| 外国文学研究序説 | 山内 良樹著 | ミネルヴァ書房 |
| 「サマセット・モームの短編小説群」 | 越川 正三著 | 関西大学出版部 |
| 「英語研究」1974-4 | | 研究社 |